

御手洗玄洋先生のご逝去を悼む

金沢大学こどものこころの発達研究センター

東田 陽博

昭和47年から61年まで、日本生理学会常任幹事を勤められた、名古屋大学名誉教授・御手洗玄洋先生には平成27年6月28日、94歳でご逝去されました。4月に、多発性胃潰瘍による大量消化管出血をされ、立ち直られたのですが、肺不全で急逝されました。哀悼の念を禁じえません。

御手洗先生は、昭和21年9月名古屋帝国大学医学部をご卒業後、内科に入局され、B29の飛行に立ち向かう我が国のパイロットの人間研究などを目的とし昭和18年に発足した航空医学研究所から昭和21年改変となった名古屋帝国大学付置環境医学研究所に昭和23年2月から勤められました。戦後、脳波を測定することが生理学関係の総合研究課題とされた事に添って、脳波の研究を開始され、東北大学生理学本川（弘一、元学長）教室に内地留学されました。昭和26年からは、名古屋大学病院眼科と共同でヒト網膜電位を研究され、網膜生理学の研究へ進まれ、教授・所長を経て、定年を迎える迄、環境医学研究所に在職されました。その後、中京大学体育学部大学院へ移られ、生理学の教育とスポーツ選手などの運動生理学的研究をされ、ゴルフやスキーも始められました。

御手洗先生のご専門はなんと言っても、視覚生理学です。コイ遊離網膜から、光刺激により過分極するS電位の記録に成功され、昭和30（1955）年、京都であった第32回生理学大会に報告されました。そして、リチウムカルミンを詰めた微小電極を使い、その電位が水平細胞由来である事を同定されました。昭和31年、助教授に昇進され、昭和34年から2年間S-potentialの発見者であるGunnar Svaetichinのいるベネズエラ国立科学研



究所（当時ベネズエラは石油の産出で景気が良かった）に2年間留学されました。慶応大学の冨田教授をはじめとする多くの網膜生理学者らが、日本の生理学の一時代を築いた一翼を担われました。

留学中、水平細胞が過分極性の光反応性を示す事と、色光情報の変調を行なう事から、グリア細胞的性質を有し、それが神経細胞へ干渉作用することから、ニューロン-グリア間干渉仮説を提案されました。当時、サイレント細胞といわれていたアストロ細胞からも膜電位が記録できる事も示され、この結果は、第24回国際生理学会議（昭和43年）にいち早く発表されました。こうしたグリアの研究はその後、東田らにより今日に至るまで続いており、昨今のグリア研究の隆盛のパイオニア的研究をされました。

一方、昭和35年、環境医学研究所に航空医学(第5)部門が設置され、その助教授、そして昭和42年には教授になられ、低圧低温実験装置による高山や航空(低重力)のシミュレーション実験や遠心加速度負荷装置による過加速度負荷(過重力)実験など、高山医学や航空医学研究もされるようになり、網膜の色覚研究とともに、二足のわらじをはいた研究生生活を自覚してスタートされました。

しかも、昭和36年、旧ソ連により、人間をのせた最初の人工衛星が実現すると、航空医学から宇宙医学へと研究対象が拡大しました。それにともない、御手洗教授は科学技術庁の宇宙開発委員会の委員に就任するとともに、宇宙開発事業団のスペースシャトル利用実験計画にも携わられました。昭和61年のフライトを目指し、コイを宇宙にもって行き、光刺激の方向に対し姿勢を制御する背光反射を利用して、無重力下での姿勢制御の乱れを研究するテーマを提案されました。森助教授(金沢大学医学部を卒業して宇宙医学に憧れ御手洗先生の門を叩いた)等を中心として進められ、実際には、1992(平成4)年9月12日から20日までの8日間、毛利衛さん搭乗のエンデバーで行われました。

先生が生理学の面白さに目覚められた若い頃は、夜中12時前に帰宅される事は無く、また、一日に何匹ものコイの網膜を遊離して研究され、コイ網膜の暗順応を待つ間は、教室員と囲碁を楽しんでいました。後半はユングの三原色心理学説の証明をすべく、水平、双極や神経節細胞の光反応を研究されました。

研究の面白さを熱っぽく語られる先生のお姿に引かれ、多くの人たちが共同研究や大学院生として参加しました。先生は大分のご出身で、視覚研究は身内の方の創業になるキャノンと関係があったのかもしれませんが、浅草観音の近くでレンズを磨いていた戦前のキャノンはカンノンカメラと言う名の会社であったとよく話されていました。

先生は若い頃、胸の病気で療養されていた頃、

同じく病氣療養でたまたま三重県津市で過ごしていた山口誓子に俳句を師事されました。先生がカラカス市を二度目に訪問された折に詠まれたお気に入り句は、「見返れば ハイビスカスの 更に紅」です。

学問への情熱は、本当に最後までなくされませんでした。ガイトンの「生理学」の翻訳やその改訂に情熱を燃やされました。93歳の平成26年の5月に金沢で、環境医学研究所第5部門の研究に関わった仲間が集まり、御手洗研究室の学問的広がりを取り返る目的でシンポジウムを開きました。先生はシャキッとした態度で最初から最後まで研究発表を聞かれ、質問もされました。その夜、料亭での芸子さんを交えてのお遊びのゲームにも負けん気を出されるなど、先生の一面が覗けました。

17年前に奥様を脳出血で一瞬に亡くされました。残されたご遺族は3人のお嬢様のご家族です。ここに心からご冥福をお祈り致します。

御手洗玄洋先生 略歴
 生年月日 大正10年1月5日
 昭和21年9月 名古屋帝国大学医学部卒業
 昭和22年1月 同大学医学部附属病院勝沼内科
 修練副手
 (昭和22年10月1日 名古屋帝国大学を名古屋大学に改称)
 昭和22年10月 医師免許証下附
 昭和23年2月 同大学環境医学研究所文部教官
 昭和25年12月 同大学同研究所助手
 昭和29年2月 医学博士の学位授与
 昭和31年7月 同大学同研究所助教授
 昭和34年7月 ベネズエラ国立科学研究所にて
 ~2年間 スペチチン博士と共同研究
 昭和42年5月 同大学同研究所教授(第5部門
 航空医学を担当)
 昭和58年4月 同大学同研究所長
 昭和59年4月 同大学停年退官
 中京大学体育学部教授
 平成7年春 勲三等旭日中綬章 受章